

平成 17 年度事業報告・収支計算書

会員の方々ならびに支援者・関係者の皆様各位

一昨年度に発生したスマトラ沖地震による津波被害の爪痕も癒えないうちに、アメリカで発生した大洪水、日本でも雪害等観測史上稀に見る災害が続いています。イラク復興も遅々として進まず、自衛隊の派遣も延長が決定しました。世界的に混沌と停滞に包まれている感があります。そんな中、市民一人ひとりが様々な事象に関心を持ち、行動を起こすことが強く求められています。このような状況だからこそ NGO や NPO の持っている役割が重要となってくるでしょう。

当会は昨年大きな転機を迎えました。ひとつめは武蔵野市からこども向けの講座「土曜学校」の委託を受けてフィリピンのこどもたちとの交流を実施した事です。昨年度から武蔵野市と協力する事により、より多くのこどもたちと関わる場ができました。武蔵野市国際交流協会と協力する事で教員の方々との連携を深め、武蔵野市と協力する事で地域にいるこどもたちとの関わりを深める。当会自身が持つ資源が有効に発揮される環境が整って来た事を嬉しく思います。

ふたつめは東京事務局の移転です。昨年末これまでのアパートの一室から駅近くの商店街に事務局を移転しました。こどもたちとの関わりだけではなく、こどもたちを取り巻く環境である地域や家族と関わって行きたいという想いは以前からありました。様々な人が通る商店街に事務所を移転した事により、フィリピン雑貨のチャリティー販売や家族会員という新しい制度など、今まで実現できなかった地域と関わるためのプログラムを多く実施できます。これにより本当の意味で地域と連携した NGO として活動が出来ると考えています。

当会の特徴である学生を中心としたボランティアの活躍も昨年は大きな広がりを見せました。その中でも特筆すべきは ACTION 関西というグループが立ち上がった事でしょう。ワークキャンプ参加者は年々全国的な広がりを見せ、当会の活動が広がってくる一方、日本国内の活動の中心は東京の為、帰国後地方の参加者は活動に参加しにくいという課題がありました。関西グループの誕生により、関西圏のみではありますが実際に行動に移せる学生が増える事を期待しています。

昨年の大きな活動の転機で得た勢いを落とさずに、当会が目的としている「こどもたちと地域の可能性を広げる国際協力」に向かってスタッフ一同切磋琢磨していきたいと思います。今年度も皆様の暖かくそして厳しい目でのご支援、ご協力をお願い致します。

平成 18 年 1 月 2 0 日

特定非営利活動法人 ACTION

ジャイラホーム支援事業

実施場所：サンバレス州カスティリヤホス行政区マグサイサイ町

実施期間：平成 17 年 1 月～同年 12 月

施設整備

以前、ガールズドームと呼ばれていた女子寮の整備を今年度は実施しました。この建物はジャイラホーム、Philippines Faith Mission Inc.(教会組織)、ACTION が事務所として使ってきた建物で、それ以前は幼稚園としても使われていましたが、新しく学校が建設されたために幼稚園はそちらの建物に移りました。

施設内でも最も古いこの建物は、老朽化が進み天井やドアの建具など危ない状態にありました。2005 年 2 月、3 月、8 月、9 月とワークキャンプを行いながら改修がすすめられてきました。12 月現在では、壁の塗りなおし、天井の吹きなおし、屋根の付け直し、必要のない壁の取り壊しが行われ、床のタイル張りも完成間近です。水道整備がまだ行われていないため、事務所の移転はまだ難しいところですが、1 月現在も整備が続けられており、2 月には完成の予定です。

2 月以降は事務所の他、こどもたちのためのコンピューター室や、図書室もこの建物に設けられる予定です。

パキュット基金

ジャイラホームへの主な支援は施設改修と建設でしたが、施設整備が整ってきたこともあり、こどもたちの生活にも目を向けようと始まったのがパキュット基金です。施設でこどもたちの世話をしているハウスマザーやソーシャルワーカーへの給与として使うことを目的としています。

ハウスマザーは週に 1 度しか休みがない上、仕事は 24 時間労働。給与も安い事などからスタッフのなり手が少ない上、ジャイラホームの財政の多くは寄付に頼るところが大きく不安定なため、何ヶ月も給与が止まってしまうことも少なくありません。ただでさえなり手の少ないスタッフが自らの生活が安定しないため辞めざるを得ない事も多くありました。母親役であるハウスマザーの入れ替わりが激しい事はこどもたちの精神面にも良い影響をあたえません。

パキュット基金は年間 6 千円の会費を会員の方から集めています。年間 100 名の会員が集まるとジャイラホームのスタッフの給与半額を支える事が出来ますが、現在は 20 名とまだまだ目標には達していません。この基金は ACTION の会員以外の方でもご協力いただけるので一般の方への広報活動も今後の課題です。

ニニヨスパグアサセンター支援事業

実施場所：オロンガボ市オールドカバラン町

実施期間：平成 17 年 1 月～同年 12 月

医療支援

ニニヨスパグアサセンター（以下センター）では口唇口蓋裂の手術を必要とするこどもたちにスポンサーを募り、手術を提供しています。提携の病院がマニラにあり、手術費自体は無料で提供されます。

しかし、手術が必要なこどもたちのほとんどは貧困地域出身であり、栄養失調状態にあるケースが多い為、手術に備えて栄養状態を安定させる費用や手術を受けるための検査費用、交通費等が一人当たり 2000 ペソ（約 4500 円）程かかります

財政によりますが、センターでは毎年 4 回～5 回の手術プログラムを行っています。その時により患者の数は 25 名～45 名ほどです。ACTION では、患者さんの交通費、手術のための検査費などを支援してきました。今度も、ワークキャンプの資金などを利用し支援を続けていきます。

マンゴジャム作成による施設自立支援

センターの運営は現在とても難しい状態にあります。センターを支援していたロータリークラブの代表が変わったのに伴い方針も変わり、医療プロジェクトへの支援が打ち切られてしまいました。また政府の視覚障害者への 5 カ年計画の助成金がひと段落し、支援が受けられなくなっています。

厳しい運営状況を打開するためにセンターでは色々な試みが始まっています。その一つがこのマンゴジャムの生産です。最初に作られたジャムは砂糖が多く、マンゴの味があまりしませんでした。試作を重ねていくにつれて砂糖の量を減らしマンゴの味をキープできるようになりました。このジャムはマンゴ、砂糖、ライムペクチン、カラマンシーで作られていて、保存料は一切使用していないので、体にもとてもやさしいマンゴジャムです。（一瓶は 1kg のフレッシュマンゴから作られます）現在はマンゴの季節ではないため一瓶の価格は 200 ペソになっていますが、マンゴの季節が来れば 150 ペソで売ることが可能になります。

マンゴジャムの収益はセンターの寮生への生活支援費になるほか、水道代、電気代をまかなえるようにすることが目的です。以前に比べるとラベルもとても綺麗になり、生徒さんも要領を得てきてはいますが、まだまだ課題は沢山あります。販売先がなく、口コミに頼っているのが現状です。

ストリートチルドレン支援事業

実施場所：オロンガボ市及び周辺地域

実施期間：平成 17 年 1 月～同年 12 月

バスケットコート改修

マバユアン地区にあるバスケットコートに屋根を設置しました。ワークキャンプの資金を利用し、ワークキャンパーと、地元の青年、大工さんが協働で作ったものです。月約 200 ペソの幼稚園の月謝が払えない事が原因でこの地域はほかの地域に比べ多くの幼稚園未就学児がいます。このような子どもたちに青空教室を提供しようとタタッグでは幼児教育プログラム（Early Child Care Development）を行っています。

小学校にあがるまえに幼稚園教育を受けていない子どもたちが落第するのを防ぐため、長期休業時や週末に実施されています。バスケットコートに屋根が設置されたことで、乾季の強い日差しや、雨季の豪雨のなかでも子どもたちが安心して勉強のできる場所が確保出来ました。また、地域のミーティングやイベントにも使われています。



バスケットコート建設風景

ストリートチルドレンへの奨学生支援

現在、ACTION とストリートチルドレン支援事業のカウンターパートであるタタッグで行われている奨学生制度には約 500 人の子どもたちがいます。毎月、タタッグのスタッフと子どもたちのお母さんと手分けをして学校へ調査に行きます。調査の内容は先生にインタビューをして、

奨学生へのコメントを貰い、出席日数をチェックします。

12の地域で行われている奨学金制度は子どもたちの親も積極的な参加が求められ、毎月一回の全体ミーティングや、毎週行われるミーティング・補修クラスも各地域で行われています。

***このプロジェクトは平成17年度今井基金による助成を受けて実施しています**



学校でのモニターを行うスタッフ

先住民族アエタ族支援事業

実施場所：サンパレス州サンマルセリーノ行政区サンタフェ町バリウエット集落

実施期間：平成17年1月～同年12月

薬草利用によるアエタ族女性のライブリフッド確立プロジェクト

本プロジェクトは、1999年から2004年まで取り組んできた、「薬草による初期治療手段確立プロジェクト」から派生して開始されたものです。ハーブ石鹸作成は、元々は初期治療確立の取り組みの中で集落の女性達が薬草により興味を持つようにと、試験的に開始したのですが、この作成がそれほど困難なものではなく、また試験的な販売結果も順調であったことから、集落アエタ族女性の組織 SAKAKA (Samahang Katutubo parasa Kalusugan=先住民族健康組合) の活動の中心となってきたものです。昨年度までにフィリピン政府公認の生活協同組合に登録、貿易産業省の商標登録も行い、定期的なハーブ石鹸の作成が始まりました。また、昨年度末には、当会からの資金的なサポートも終了し、完全に SAKAKA が自己資金を運用しての運営へと切り替わっています。

本年度、当会では、この SAKAKA の活動の持続性の強化を目指し、下記の4つの活動を実施しました。

1. ハーブ石鹸の質の向上のための取り組み・・・昨年度までで、SAKAKA メンバー約25名(全メンバー中の半数)が作成技術を既に取得していたが、作成者によって分量等の品質が均一ではないという課題が見られていた。そこで、元当会スタッフの保健婦や SAKAKA 中心メンバーによる他のメンバーへのト

レーニングを実施。また、これまでは希望者が数人で不定期に作成に加わっていた作業形態も変更し、メンバー内から生産グループを選出、計5グループとなったメンバーとそれぞれのグループに設置された1名の技術の高いリーダーによる生産へ、これに加え、初期から石鹸作成に関わってきた最も技術の高いメンバー2名が生産責任者となって、活動日には必ず監督を実施するという形態へと移行した。これにより、それまでのばらつきのあった品質に向上が見られ、生産形態も徐々に整ってきた様子が見られている。その他では、販路の安定化に貢献するため、包装や石鹸の形にも変更を行うことを計画していたが、メンバーと相談しながらの試作の段階までの状況となっており、実際の変更にはまだ至っていない状況である。なお、形や包装には変更は実施していないが、フィリピン人向けの販売を重視して、従来よりも香料の増加という変更は本年度行っている。

2 .組織の意思決定のための取り組み・・・SAKAKA がひとつの組織として独自で企画立案や実際の運営を可能な状態となることを目的として、昨年度まで実施してきたリーダーシップトレーニングを計6回実施した。講師は昨年度まで主に実施してもらった貿易産業省職員に加え、サンマルセリーノ行政区の生活協同組合担当職員にもお願いし、作業分担や会計、意思決定等の内容でのトレーニングをSAKAKAメンバーに実施した。また、トレーニング方式に加え、当会スタッフも随時集落滞在中にアドバイスを行ってきた。この結果、上記の生産形態の変更に加え、販売グループ・会計グループもメンバーを固定して活動を機能化、隔週での定期ミーティングの固定化等の変化が見られている。昨年までは希望者が集まって不定期に活動していたことに比べ、活動形態が固定したこと、十分とはいいがたいが、会計もSAKAKAメンバーによって管理されはじめたことは活動の持続性強化への大きな変化となった。しかし、ミーティングメンバーが一部に固定される、会計に慣れていない等の課題も見られており、次年度以降も引き続きフォローアップを行っていく。

3 .製品販路の確保のための取り組み・・・昨年度までの主な販路はマニラ在住の日本人協力者を通しての販売とメンバーの訪問販売であったが、これに加え、マニラやサンバレス州内での卸売りの販路を確保することで、SAKAKAの安定した活動の継続に貢献することを目的としたのが本取り組みである。具体的に、SAKAKAメンバーによるサンマルセリーノ付近の店舗への交渉、当会スタッフによるマニラやオロンガポでの店舗への交渉を行ってきた。この結果だが、毎月1,500個程度を販売できる販路を確立するという目標には至らなかった。定期的な卸売りは確立できず、単発的な販売のみという結果に終わっている。ただ、単発の販売でもマニラの日本人の方々からの多大なご協力や、日系コンビニエンスストアへの試験的な販売等が主な販路となり、本年度のみで純益で約76,000ペソ(邦貨約152千円)という収益がSAKAKAに得られている。昨年度は資材の一部は当会がサポートしていたが、本年は資材費・作成にかかるメンバーへの人件費等全経費をSAKAKAの自己資金から運用しており、それでもこの純益を残せたことは、数字で言えば大きな成果となっている。

4 .その他の取り組み・・・付随的な活動として、その他薬草を利用したクリームの作成や洗濯用石鹸の作成についても指導を行うことを計画していた。洗濯用石鹸は作成指導を実施したのみで、定期的な作成と販売は行っていない。これは、作成時に既存のボディソープ用石鹸と混同する恐れが指摘されたためである。クリームについては、2年前に作成指導していた肌荒れ緩和のクリームを定期的に作成開始、マニラの日本人コミュニティへの販売を開始した。

昨年度までの当会とSAKAKAの共同での取り組みとは異なり、本年度の当会の活動は、主体となって活動するSAKAKAの側面的なサポートを行うというものでした。上記の様に、ハーブ石鹸作成の生産形態も徐々に整ったり、収益もほぼ2倍の純益を得られるようになったりと、

好ましい変化が見られるようになってきました。

残る課題は本年度達成できなかった契約販売の実現です。日本人協力者の方々を通しての販路以外の、ローカルマーケットの確立を目指し、次年度も SAKAKA への側面的なサポートを行っていく予定です。



SAKAKA メンバーへのリーダーシップトレーニング(1月)



アカプルコクリーム作成の様子(10月)

先住民族のための果樹植林・家畜飼育技術指導（21世紀の森プロジェクト）

「果物をお腹いっぱい食べたい」ピナトゥボ山噴火後、多くの自然が失われたバリウェットで、こんなこどもの一言から始まったのが本プロジェクトです。アエタ族の青少年組織 KAB(Kabataan Action ng Baliwet=バリウェット青年の行動)による果樹園設置・山羊飼育を主な活動として、緑化やそれに伴う所得の向上、生業として将来活用する農業・家畜飼育技術の取得等を目的とした本プロジェクトは、1999年より開始し、本年度で7年目を迎えることとなりました。

元は2004年までの果樹園設置と農業指導で終了を予定していた本プロジェクトですが、KABが自立して活動を行っていくために課題となっていた自己資金基盤の確立を目指し、2年の期間を延長し、新たに山羊飼育も開始することになりました。本年度はこの延長の2年目、KAB支援の最後の年であり、主に下記の3つの活動を実施しました。

1．果樹園の継続管理及び KAB への植林技術指導・・・本活動では、昨年度までに設置した 3.5 ヘクタールの果樹園(マンゴー・ココナッツ・カシューナッツ・バナナ等の果樹と数種の野菜を栽培中)内での管理活動を通して、KAB メンバーであるアエタ族青少年への農業技術指導を実施した。具体的には、果樹への水遣りや草抜き等の管理活動の他、キャッサバや茄子・西瓜・インゲン等の野菜の栽培指導と、堆肥の作成指導を実施。また、管理設備として、集落内に作業倉庫も建設している。本活動は 1999 年より実施しているものであり、本年は定期管理や野菜栽培については、農業スタッフの指導無しでも、KAB メンバーで計画を立て、管理を実施できるようになったこと等から、農業技術取得の向上が見られる。また、昨年までの有機肥料の作成指導に加え、本年は近隣の青年海外協力隊の方から指導してもらい、粉殻を利用した炭の土地への混入等も新たに実施し、新たな知識の普及にも努めた。また、本果樹園の管理活動は、6 月末までは国際ボランティア貯金配分金を頂いて、有償での作業を行ってきたが、7 月からは管理の大部分を KAB メンバーに引き継いでおり、毎月 4 名分の現場管理人人件費(果樹園と山羊管理あわせて計 4 人)のみ当会で支援を行ってきた。この結果、有償での作業時の常に草刈や整地が実施されていた状況に較べれば、KAB 引継ぎ後の果樹園は管理が行き届いているとは言えない状況ではある。しかし、KAB メンバー内で役割分担が行われ、コミユナルワークとして毎週無償での作業を実施する等の対応を KAB が独自で行っていること、また果樹は既に安定期となっており、多少の雑草の繁茂であればその生育に影響は見られないこと等から、今後もこの KAB のコミユナルワークが安定していけば、十分に KAB による管理が可能な状況となっている。

2．山羊飼育の開始及び KAB への家畜飼育技術指導・・・本活動は昨年度バリウェット集落内に設置した 4 ヘクタールの山羊飼育エリアを利用し、山羊の飼育を開始したものである。本年 1 月に雄 2 頭、雌 48 頭の山羊を購入し、本エリアでの飼育を開始した。昨年度設置した 4 ヘクタールには既に山羊小屋とフェンスの設置・飼料植え付けが行われていたが、これに加え本年は新たに水飲み場の設置やエリア内のフェンス設置による分割等を実施した。これらの作業や飼育、予防接種や虫下しの実施等を通して、当会のスタッフによる KAB への指導を実施、果樹園と同様に、6 月までは国際ボランティア貯金配分金を頂いて有償の作業を実施してきたが、7 月からは毎月 4 名分の現場管理人人件費(果樹園と山羊管理あわせて計 4 人)のみ当会で支援を行ってきた。この 1 年の活動の結果、計 50 頭であった山羊は現在 60 頭に増えており、既に販売が可能な状況になっている。次年度からは KAB による管理活動が行われていくが、この山羊販売の収益を自己資金として運用していくことが可能となり、KAB の活動の持続性強化に成果が見られることとなった。

3．リーダーシップ・組織運営・会計トレーニング・・・本活動は外部ファシリテーターに委託してのリーダーシップ・組織運営トレーニングと、当会スタッフによる会計トレーニングを実施したものである。前者 2 つのトレーニングに関しては、提携団体である FOCUS(Foundation for Cultural Survival, Inc.)のディレクターであるティマ博士に委託、本年度は計 8 回のトレーニングを実施した。会計については、トレーニング形式は実施しなかったが、当会スタッフや調整員がバリウェット滞在時に随時 KAB の会計担当者に指導を行った。これらの指導の成果であるが、次年度からの完全な引継ぎに向けて、KAB メンバー内での収益の配分方法や管理方法について頻繁に KAB 独自で話し合いが行われ、権利書も独自で作成する等の状況から、好ましい変化が見られるようになっている。課題としては一部メンバーにトレーニング参加も話し合い実施も限られていることが挙げられるが、今後も必要に応じて当会からのアドバイス等を実施していく。

KAB の自己資金確保という課題から、延長を行った本プロジェクトですが、山羊の順調な飼育が可能となったことで、この課題も改善に向かうこととなりました。また、トレーニング等の組織面での指導により、これからは自分達で活動をと KAB メンバーが自覚し、実現に向けて自主的な取り組みが見られるようになったことも本年の大きな変化のひとつです。

他プロジェクトであるハーブ石鹸作成が女性グループ SAKAKA に 1 年前に完全引き継がれたように、本プロジェクトも来年度からは完全に KAB に引き継がれ、KAB の自己資金を運用しての取り組みとなります。協会としては、フォローアップとして、組織面でのアドバイス等を引き続き行っていく計画です。

***本プロジェクトは、6 月末までは、平成 16 年度国際ボランティア貯金配分金を頂いて実施しました。**



果樹園での水牛による耕作の様子(6 月)



KAB メンバーによる山羊への予防接種の様子(6 月)

アエタ族への薬樹栽培普及プロジェクト

**実施場所：サンバレス州サンマルセリーノ行政区サンタフェ町バリウエット
ブアグ・バナバ集落**

実施期間：平成 17 年 1 月～同年 12 月

本プロジェクトは平成 15 年 10 月末より開始した、「アエタ族への薬樹栽培普及のためのモデルファーム設置プロジェクト」の継続となるものです。現状で生業に限られ、所得も不安定な状況にあるバリウエット・ブアグ・バナバの 3 つのアエタ族集落において、火山灰でも育ち、販路が確保しやすいサンボン・ラグンディ等の薬樹栽培をアエタ族の新たな生業として普及し、持続的な生業の確保とそれに伴う所得の向上を目的としています。本年度は具体的に下記の 4 つの活動を実施しました。

1．薬樹栽培モデルファームの管理・・・昨年設置してラグンディ・サンボン2種を植えたモデルファームの継続管理を実施。水遣りや植え替え等の定期管理に加え、ファーム周囲へのチャングバットの植え付けを実施。また、薬樹の収穫時に利用する乾燥機と製粉機を購入し、薬樹の栽培から収穫、製粉までの加工が同ファームで可能となった。また、これに伴い、空気乾燥用の施設の増築・改修を実施、剪定・洗浄・空気乾燥・オープンによる乾燥・製粉までの一連の収穫作業を実施できる設備が整った。植えたサンボン・ラグンディの生育状況であるが、2種共に収穫可能な状況に生育しており、サンボンは2回・ラグンディは1回の収穫作業を実施した。収穫は本年度が初の取り組みであったため、収穫作業のプロセスやコスト、乾燥後の保存方法等に不十分な点があったが、記録と経験を元に次回からの収穫を効率的に行うように改善している。全体的に、ファーム設備は整い、収穫も十分に発生している状況となっている。しかし、下記で報告する販路の課題から、本活動によって期待していた、ファーム収益からの管理費と住民栽培普及の資金の活用という目標は達成できなかった。

2．販路の確保・・・本活動は、昨年度まで取り組んだフィリピンの企業との交渉を継続し、薬樹の販路を安定化させることを目指して実施したものである。当初の計画では、本年度中に企業との販売契約を締結し、販路の安定化を図ることを目標としていた。しかし、本活動が、本年度最も停滞し、またその結果、プロジェクト全体に大きな影響を与えることとなった。この販路確保に関しては、当会のみでの実施は困難が予想されていたため、薬樹普及の取り組みが開始された平成15年10月より、仲介の企業と交渉を行ってきた。その結果、空気乾燥まで加工した薬樹の葉を収穫開始次第出荷するという内容での合意が昨年度までに交わされてきた。その後、より販売が容易で契約栽培が可能であるという仲介企業の要望から、計画を変更して熱乾燥を行えるオープンの購入とパウダー状までの加工が可能となる製粉機の購入を行い、この仲介企業を通しての、フィリピン国内の製薬企業への契約栽培開始を予定してきた。しかし、その後、この仲介企業の業績不振から事業縮小という問題が発生、ここまでの調整が全て立ち消えになるという深刻な状況となった。そこで、この改題が発生した11月後半より、当会が直接製薬企業との交渉を実施。その内の数社は購入について興味を示してはいるが、本年度中の販売には至らない結果となった。

3．住民間での栽培普及・・・本活動は、モデルファームと同様の薬樹の栽培を、各住民の耕作地で普及させていくものである。本年度初旬に、モデルファームでの収穫と販売を成功させることで、植林時期である今年の5月から6月にかけてはバリウエット・バナバ・ブアグ住民の多くが薬樹栽培を新たに開始することが見込まれていた。しかし、上記のような販路の課題が発生したことから、住民間での栽培は実施されなかった。実際に、所得が不安定な住民の多くが薬樹栽培に興味を示している。しかし、やはり販売できるのかという点が住民間での最大の関心であり、また、当会としてもこれが確実に保証できる状況に至っていないため、栽培促進の取り組みは実施できなかった。

4．モデルファームの拡大・・・本活動は、2ヘクタールの既存のモデルファームに加え、新たに耕作地の拡大を行うものである。本年6月より整地作業を開始、9月までの植林を経て、サンボン1.5ヘクタール、ラグンディ1.5ヘクタールの計3ヘクタールの薬樹栽培エリアを新たに開拓した。植林後は草抜きや再植林等の管理作業を実施した他、既存の2ヘクタールに設置していたドリップシステムとスプリンクラーもこの新規エリアに移転し、薬樹の安定した生育を図ってきた。この結果、本年度末の時点で、サンボン・ラグンディ共に活着率9割以上という安定した生育状況となっている。特にサンボンに関しては、昨年度実施した最初のファームエリアでの管理に課題があり、活着率が6割程度であったが、このときの経験を生かし、本年度は高い成果を得ることができた。

本プロジェクトは、本年度のアエタ族支援事業の中心の取り組みであり、生業の確保と所得の向上というアエタ族が抱える課題の改善につながる大きな可能性を持つものです。しかし、本プロジェクトの根幹でもあった、仲介企業を通しての販路の確保という前提が上記のように立ち消えとなるという課題が発生し、設備面・技術面共に、薬樹栽培自体は十分に可能な状況に至っているものの、最も重要な販路が確保できていないという状況となっています。このような状況を踏まえ、次年度には販路の確保を重点的に取り組み、出荷開始を経て住民間での栽培普及にも取り組んでいきます。



モデルファームでのサンボン収穫作業(4月)



新規エリアでの草抜きの様子(11月)

国際ボランティア体験事業

ジャイラホームワークキャンプ

平成 17 年 2 月 2 日～2 月 22 日 20 名：女子寮の改修に参加
平成 17 年 3 月 2 日～3 月 22 日 28 名：女子寮の改修に参加
平成 17 年 7 月 31 日～8 月 20 日 28 名：女子寮の改修に参加
平成 17 年 9 月 1 日～9 月 21 日 26 名：女子寮の改修に参加

本年度もジャイラホームにおいて各 3 週間、計 4 回のワークキャンプを実施し、女子寮の改修やホームステイプログラム、こどもとのイベント企画等を実施しました。

アエタワークキャンプ

平成 17 年 2 月 23 日～3 月 14 日 20 名：薬樹栽培モデルファーム収穫施設改築に参加
平成 17 年 8 月 25 日～9 月 14 日 20 名：薬樹栽培モデルファーム植林作業に参加

本年度もバリウエット集落において各 3 週間計 2 回のワークキャンプを実施し、薬樹栽培普及プロジェクトでの収穫施設の改築、拡大エリアでの薬樹植林に参加してもらった他、ホームステイや運動会、小学校訪問、文化講座等を実施しました。

イバワークキャンプ

平成 17 年 2 月 1 日～21 日 7 名：多目的センターの建設に参加

2002 年 3 月に始まったイバのワークキャンプも今回で最後となりました。地域のために建設を続けてきた多目的センターのタイル貼りやペンキ塗りといった最終工程を実施しました。3 月にはセンターのオープニング式典を開催し、多くの過去参加者が駆けつけ、地域の方々とともに盛大な催しとなりました。

ニニョス・タタッグワークキャンプ

平成 17 年 9 月 2 日～9 月 22 日 27 名：バスケットコート改修に参加

今夏第一回が開催されたニニョス・タタッグワークキャンプでは、タタッグの支援先の地域のバスケットコートの改修作業を行いました。また週末にはストリートチルドレンのためのエデュケーションに参加しペットボトルロケットや楽器作りを行いました。3 週間滞在したニニョスバグアサセンターの子どもたちとも交流を深めました。

国内事業

武蔵野市国際交流協会「教員ワークショップ現地視察」受け入れ

教員ワークショップとは国際理解の視点を総合学習や他の教科に取り入れた事業を学外のリソースA（在外外国人、NGO等）と協働で実施することを目的に実施しているワークショップです。開発教育やNGOの専門家の理論的な意見を取り入れ、教員とNGOが協働して授業実践を行なっています。

当会が実施している学校との授業の多くがこの教員ワークショップを通じて企画・実践しています。通年で月1回のワークショップのほか夏季には3日間の大規模なワークショップを実施しており、今年度は都内から120名の教員が参加し、全国でも最大規模の教員向けワークショップを実施しています。

当会は平成14年度よりこのワークショップに授業実践をする際の地域リソース(人的)資源)として参加をしてきました。多くの教員の方々と授業実践していく中で、実際にフィリピンの現場のリアリティを体験し今後の授業作りに活かしたいという意見から武蔵野市国際交流協会と昨年度より3カ年計画で現地視察を企画し、2年目となる今年度は以下の日程で受け入れを行ないました。現地視察に関わる費用は独立行政法人国際協力機構(JICA)の市民参加協力事業へ国際交流協会が申請し助成を受けました。

期 間：8月19日(金)～8月24日(水) 5泊6日

視察者：教員5名、開発教育専門家1名

6日間で、当会の支援先の孤児院ジャイラホームや先住民族アエタ族の集落、ピナツボ山火山で被災した方々の住むバライバイ再定住地区などを訪問しました。バライバイ再定住地区の小学校・高校では日本の小学生・中学生とのビデオレター交流プログラムを行なったり、現地のNGO「PETA(フィリピン教育演劇協会)」を呼び演劇の手法を用いた新しい学校教育の可能性を探りました。

学校教育との協働授業実践 / 学生ボランティア派遣

今年度は以下の学校で協働授業を実践しました。また、必要に応じて学生のボランティアを派遣しました。各学校では、代表による講演の後、学生と子どもたちが少人数のグループをつくり自分たちのフィリピンでの経験や将来の夢などを語り合いました。

～平成17年度授業実践 / 学生ボランティア派遣実績～

江戸川区立西葛西中学校(選択社会)* 通年

町田市立第一中学校(選択英語)* 半期

世田谷区立桜木中学校(社会科公民)

江戸川区立清新第一中学校（総合学習）学生 5 名派遣
東京都立八王子北高等学校（総合学習）学生 2 4 名派遣

講師派遣

フィリピンでの活動・経験を日本の地域社会に還元するため代表の横田を講師として各種セミナー、講演会に派遣しました。

～平成 1 7 年度講師派遣実績～

武蔵野市国際交流協会「教員ワークショップ」リソースパーソン
武蔵野市国際交流協会「青年のための国際理解講座」リソースパーソン
嘉悦大学（NGO 論）
亜細亜大学（ボランティア論）講師
独立行政法人国際協力機構（JICA 九州）国際協力講座講師
独立行政法人国際協力機構（JICA 八王子）国際協力講座講師
独立行政法人国際協力機構（JICA 東京）マルチアクターによる市民参加協力推進委員
独立行政法人国立中央青年の家 プログラムアドバイザー

武蔵野市「土曜学校～世界を知る会～」

武蔵野市が主催する土曜学校の中の一講座「世界を知る会（小 4 ～ 6 コース）」。今年度は武蔵野市から委託を受け当会が全 1 1 回を担当しました。武蔵野市内の小学校に通う小学生 2 5 名が集まり、それぞれフィリピンのバライバイ再定住地区の小学校に通う小学 4 年生とパートナーを組み、ビデオレター交換や文通などの交流を行ないました。当会の学生 5 名もボランティアスタッフとして活躍しました。また、会の最後には集大成として国際協力機構の JICA ネットを利用し、自己紹介やゲーム、歌などリアルタイムのコミュニケーションを実現しました。小学生からは「フィリピンの子が近くにいるようで、不思議な感じだった」「（豆送りゲームで）フィリピンの子は器用だと思った」などの感想がありました。の全 1 1 回を通し、テレビ番組制作会社の取材が入りました。

朝陽学園ボランティア派遣

昨年度に引き続き今年度も三鷹市にある児童養護施設「朝陽学園」へボランティア派遣しました。ボランティア派遣項目は以下の通りです。

- 1) 週末遊びボランティア（通年）
- 2) スキー教室付き添い（3 月）
- 3) 岩井海水浴場付き添い（7 月）
- 4) こども祭り（9 月）
- 5) 朝陽学園バザー（1 1 月）

スキルアップ合宿

ボランティアスタッフやワークキャンプ経験者を対象とした当会主催のスキルアップ合宿「つくつく合宿」。今年度も5月と11月にそれぞれ日の出町の武家屋敷と当会の旧事務所で開催しました。木曜インターンが企画から当日の運営までを担当し、総勢約30名が参加しました。合宿では、さまざまなワークショップやディスカッションを行ないました。

国際協力イベントへの参加・出展

1) グローバルフェスタ(10月1、3日)

10月1、2日に日比谷公園で開催されました。このイベントのために募った学生スタッフが中心となって企画から当日の運営までを行ないました。ブースではワークキャンプの紹介を中心に行い、ワークキャンプ説明会も随時開催しました。一時はブースに入りきれないほど多くの方が説明を聞きに来てくれました。

2) 武蔵野市国際交流協会「むさしの国際交流まつり」(11月6日)

武蔵野市国際交流協会主催で、武蔵野市周辺のNGO・NPOや武蔵野市在住の外国人や留学生がブースや飲食店を出展したりワークショップを開催したりする地域に密着したお祭りです。今年度当会はピナツボ友だちの会、ピナツボ復興むさしのネット、P&Jの3つの団体と協働で「フィリピンコーナー」を開催し、当会はそのコーナーの中でフィリピンに関するクイズ形式のワークショップやフィリピン風カキ氷八口八口の販売、フィリピン雑貨の販売、パネル・写真展示を行ないました。